

教育実習における実習評価と自己評価の差異に関する研究

小山 祥子 村野 かおり

An Investigation into the Differences between Kindergarten and Student Teaching Practice Assessments

Shoko KOYAMA / Kaori MURANO

論文要旨

教育実習における評価は、自己の適性や専門性がどの程度身についているのかを客観的に知ることができる指標である。実習先の幼稚園や指導担当教員には、それぞれ独自の基準があり固有性が強いとも言われている。文科省では、実習先における実習生の指導・評価について明確な基準がないことを実習の課題としているが、未だ指針は示されず、評価は養成校ごとにその項目と基準を定めているのが現状である。そこで、本稿では本学における新カリキュラムの実施と、平成30年度に改訂される幼稚園教育要領の実施にあわせて、実習評価内容の見直しと事前事後指導の充実に向けての指標を得ることを目的に、実習園側の実習評価と学生自身の自己評価を比較検討した。

結果、調査対象の学生は、自己評価よりも園評価の方が全般的に高いことが認められた。詳細項目によっても異なるが、評価について学生側と園側の認識にずれが生じないよう、より明確で具体的な評価項目の設定が必要であることが確認され、間接的には、授業時のみならず学業生活全般の態度育成にも関連していることが示唆された。

キーワード 幼稚園 教育実習 実習評価 自己評価 評価項目 評価基準

1. 問題の所在

教員免許状を管轄する文部科学省では、教育実習は、学校現場での教育実践を通して、学生自らが教職への適正や進路を考える貴重な機会であると意義づけている¹⁾。一方、教育実習における評価の内容と基準は、各養成校や実習先によって異なる現状がある。教育は、その成果を数値で評価することが困難な分野であるといわれているが、昨今ではどの教育段階においても、成果について可視化していこうとする動きがみられる²⁾。このような状況下、文科省では自ら、実習生受入校における実習生の指導・評価に、国としての明確な基準がないことを、教育実習の課題として挙げている³⁾。国は、より

質の高い教員養成を目指して折々に改革を行ってきているが、先の課題認識をもちながらも、未だ実習評価の基準については指針を示していない。このことは、各教員養成校の判断に一任されているものと解釈できる。一部の自治体では、養成校同士で連絡協議会を設置し、評価基準の統一化を図っているところもあるようだが、独自の教育方針に基づいた評価項目が設定できないというジレンマに悩んでいることも報告されている⁴⁾。本学においては、教育実習を担当する教員が、評価内容と基準を立案し、都度見直ししながら実習評価票を作成している。

一方、幼稚園教諭を目指す学生の学力、資質、モチベーションは、時代や社会情勢の変化と

共に変容していることは、一般的によく言われることである⁵⁾。昨今、本学においても学生の変容を感じる教員が多い。実際に、私立の高等教育機関では入試形態の多様化に伴い、学生も多様化し、その影響からか、本学においても個別対応が必要な学生や、実習を取り下げる学生の微増が確認され始めている。

そこで、幼稚園教諭養成の質の維持と向上のためにも、多様化した学生に合わせた教育実習の事前事後指導のさらなる充実を図らねばならない。

本学における新カリキュラムの実施と、平成30年度からの改訂幼稚園教育要領の実施に鑑み、評価票再考の時期であることを認識しているところである。

2. 研究目的と方法

そこで、本研究では、実習園側と学生側の実習に対する評価の差異に着目し、評価項目と評価基準について検証していく。その結果から、評価に関する課題や学生のとらえ方を考察し、今後の実習評価票の再考と、より充実した事前事後指導の実施に向けての示唆を得ておくことを目的とする。

これまで、教育実習に関する研究は、さまざまな観点から全国の養成校でなされている。その中で、実習評価に関する研究（大塚 1999、篠原 2011）を参考に進めていくこととした。

研究方法は、実習園側の実習評価（以降、園評価と表記）と実習学生側の実習自己評価（以降、自己評価と表記）を比較し、その差異を考察する。

調査対象は、本学保育科2年生のうち、幼稚園教諭二種免許取得希望学生 110 名とし、平成 28 年度 6 月 6 日（月）から 6 月 25 日（土）までの 15 日間に実習した 107 園からの園評価と自己評価の評価項目を分析、検討していく。尚、園評価と自己評価は、本学が作成している「教育実習評価票」⁶⁾を双方に用いた。園評価票は、実習終了後 1 カ月以内に本学実習指導室

に返送され、自己評価は実習終了直後の最初の授業時 6 月 30 日（木）に実施した。

本研究実施にあたっては、研究倫理に基づき、対象学生 110 名に研究趣旨を説明し、園評価と自己評価を使用することの承諾を書面にて得ている。

3. 研究結果、及び考察

1) 実習評価の内容と基準

園評価と自己評価に使用した「教育実習評価票」の評価の観点とその詳細項目は表 1 に示し、評価基準と配当得点は、表 2 に示した。

表 1 評価の観点と詳細項目

評価の観点	詳細項目
人物	1. 挨拶・言葉遣い
	2. 服装・身だしなみ
	3. 人柄・態度
実習態度	4. 健康管理
	5. 事前の準備
	6. 積極性
	7. 協調性
	8. 責任感
実習記録	9. 記録の提出
	10. 記録の整理
	11. 観察力
	12. 表現力・考察
保育能力	13. 状況判断・かかわり方
	14. 子どもの発達の理解
	15. 遊びや生活の指導
	16. 指導計画
総合評価	

表 2 評価基準と配当得点

評価基準	配当得点
A. 優れている	5
B. 良い	4
C. 普通	3
D. 努力を要する	2
E. 特に努力を要する	1

2) 園評価と自己評価の平均値比較

全実習園と全実習学生の評価を点数化し、評価の観点の平均値を算出したものが表3である。総合評価をみると、園評価の平均値3.8ポイントに対し、自己評価の平均値は3.4ポイントで、園評価の方が0.4ポイント上回っていた。園評価で最も高い評価の観点は「人物」、低い観点は「保育能力」であり、学生側の自己評価も同様の結果であった。

表3 評価の観点の平均値比較

単位：点

評価の観点	園評価	差	自己評価
人物	4.3	> (0.1)	4.2
実習態度	3.8	> (0.2)	3.6
実習記録	3.7	> (0.1)	3.6
保育能力	3.6	> (0.2)	3.4
総合評価	3.8	> (0.4)	3.4

次に、評価の観点ごとに考察していく。詳細項目1～16の平均値を算出したものが表4である。

(1) 人物

評価の観点「人物」は、全項目において4ポイント以上であり、他の観点の中で一番高い値を示していた。人物評価は、専門的技術には直結しないが、幼稚園教諭にふさわしい基本的要素を備えているという園側の評価と学生の認識が一致していると理解できる。本評価の実習は、1年次からすると4回目の実習であり、実習経験の積み重ねから、社会的態度は身につけると受け止められる。

中でも、「2.服装・身だしなみ」と「4.健康管理」の平均値は最も高く、「3.人柄・態度」と併せて園評価の方が自己評価を上回っていた。特に、「4.健康管理」は0.3ポイントも差があった。一般的に自分の健康については、自分が一番よ

表4 園評価と自己評価の平均値比較

単位：点

評価の観点	No.	詳細項目	園評価	差	自己評価
人物	1	挨拶・言葉づかい	4.1	=	4.1
	2	服装・身だしなみ	4.4	> (0.1)	4.3
	3	人柄・態度	4.2	> (0.2)	4.0
	4	健康管理	4.4	> (0.3)	4.1
実習態度	5	事前の準備	3.8	> (0.3)	3.5
	6	積極性	3.6	=	3.6
	7	協調性	4.0	> (0.2)	3.8
	8	責任感	3.7	> (0.1)	3.6
実習記録	9	記録の提出	3.9	< (0.2)	4.1
	10	記録の整理	3.7	=	3.7
	11	観察力	3.7	> (0.3)	3.4
	12	表現力・考察	3.5	> (0.3)	3.2
保育能力	13	状況判断・かかわり方	3.5	> (0.1)	3.6
	14	子どもの発達の理解	3.7	> (0.3)	3.4
	15	遊びや生活の指導	3.6	> (0.1)	3.5
	16	指導計画	3.6	> (0.4)	3.2
総合評価			3.8	> (0.4)	3.4

くわかっているものである。体調が優れないことを学生自身は認識していたが、実習園ではそのことがわからないように通常通りに実習に取り組んでいたということが窺える。「1.挨拶・言葉遣い」は、園評価と自己評価が一致しており、双方の認識にずれはないといえる。

(2) 実習態度

「6.積極性」は、園側と学生の認識が一致していたが、3.6ポイントとあまり高い値ではなかった。一番高い項目はどちらも「7.協調性」であったが、園評価と自己評価に0.2ポイントの差があり、園評価の方が高かった。学生側としては、協力姿勢が示せなかったという自覚、あるいは協調性に必要なコミュニケーションに

自信が持てなかったのではないかと推測できる。園評価と自己評価の差が最も大きかったのが「5. 事前の準備」で、0.3ポイント園評価の方が上回っていたのに対し、自己評価は実習態度の中で最低値であった。教育実習においては、事前のオリエンテーション時にあらかじめ課題を出す実習園が多くなってきている⁷⁾。その傾向からか、事前に出した課題は準備してきているという園側の評価が高い値につながっているものと考えられた。

(3) 実習記録

実習記録は、実習生にとって実習中最も時間

を要し、苦手意識のある分野であるといわれる⁸⁾。「10. 記録の整理」に対しては共通評価であったが、「9. 記録の提出」は0.2ポイント自己評価の方が高かった。学生側はきちんと出したという認識、一方、園側は提出がなされなかったという認識である。この差異は、園側は期日を守ることは自明のこととしているが、学生側にしてみると、提出したという事実だけの評価認識ではないだろうかと考える。つまり、学生は提出期限については評価の中に認識されていないか、あるいは認識の甘さがある可能性がある。評価項目を具体的表現へ変更するか、または、事前指導の授業や学業生活の中で、提出期限に

単位：％

評価の観点	No.	詳細項目	園評価 > 自己評価			園評価 = 自己評価			園評価 < 自己評価		
			0	10	20	30	40	50	60	70	80
人物	1	挨拶・言葉づかい	33.6			34.5			31.8		
	2	服装・身だしなみ	32.7			42.7			24.5		
	3	人柄・態度	36.4			34.5			29.1		
	4	健康管理	33.6			47.3			19.1		
実習態度	5	事前の準備	47.3			25.5			27.3		
	6	積極性	31.8			38.2			30.0		
	7	協調性	41.8			30.9			27.3		
	8	責任感	40.0			31.8			28.2		
実習記録	9	記録の提出	20.9		44.5			34.5			
	10	記録の整理	31.8			35.5			32.7		
	11	観察力	42.7			36.4			20.9		
	12	表現力・考察	41.8			34.5			23.6		
保育能力	13	状況判断・かかわり方	27.3		35.5			37.3			
	14	子どもの発達の理解	41.8			38.2			20.0		
	15	遊びや生活の指導	35.5			38.2			26.4		
	16	指導計画	44.5			37.3			18.2		
総合評価			51.8			28.2			20.0		

図1 園評価と自己評価の割合比較

対する意識を高めていくことが示唆される結果である。園評価の所見欄には、翌日に日誌が提出できなかったという記述が散見された。

「11. 観察力」と「12. 表現力・考察」については、どちらも0.3ポイント園評価の方が高かった。学生側としては、これらに関しては、難しいという認識や苦手意識が強く働いているものと思われた。

(4) 保育能力

保育能力は、評価の中でも特にその専門性が求められる内容である。4つの評価の観点の中では、全ての詳細項目において最低評価であった。「13. 状況判断・かかわり方」は自己評価の方が高く、他3つの項目は園評価の方が高かった。特に、「16. 指導計画」は0.4ポイント、「14. 子どもの発達の理解」は0.3ポイント園評価の方が高かった。学生側が低い評価をつけたのは、苦手意識が働いているのか、または実習時の責任実習での反省の表れとも考えられる。園側は学生の指導計画と発達理解の能力は、学生自身の認識以上に高く認めているということになる。

3) 園評価と自己評価の割合比較

次に、評価項目ごとに園評価と自己評価の割合を算出し考察した。図1の表示は、左側より「園評価の方が自己評価よりも高い」、中央は「園評価と自己評価が同じ」、右側は「自己評価の方が園評価よりも高い」ことを意味したグラフである。

これを見ると、園評価と自己評価が同じである割合が一番高いのは「4. 健康管理」の47%、次いで「9. 記録の提出」45%、「2. 服装・身だしなみ」43%であり、おおよそ二人に一人が園側と同じ評価認識を持っていた。先の2)で明らかになった結果が、より顕著に示されていた。

4) 個別評価の比較

学生によって自己評価の基準も異なるが、ここでは、レーダーチャートを用いて視覚的にそ

の特徴を個別に分析し、学業生活の態度との関連から考察する。その際、(1) 園評価の方が高い学生、(2) 自己評価の方が高い学生、(3) 園評価と自己評価がほとんど同等の学生の3つに分け、より顕著な学生を抽出し、学業生活の態度は、授業の出席数⁹⁾から考察した。

(1) 園評価の方が自己評価より高い学生

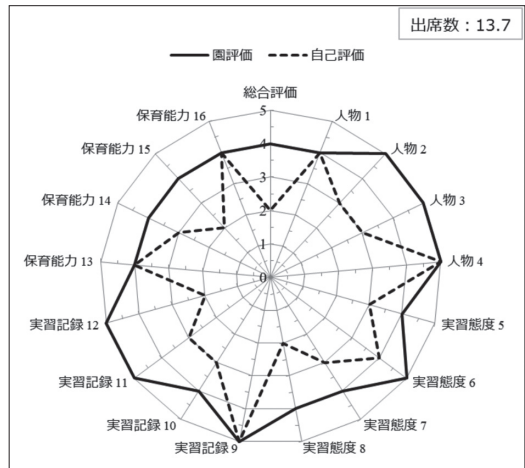


図2 学生A

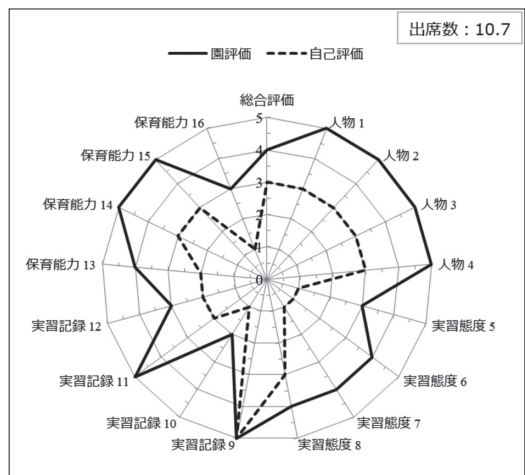


図3 学生B

学生AとBは、園側の評価と同じ項目もあるが、異なる項目の方が多く、その差も大きい。全体的に自己評価が内側に偏っている。教育実習の授業出席数は、Aは13.7、Bは10.7で、

あまり高くはない。学業生活における学びの姿勢が消極的であれば、実習に対する評価も消極的なつけ方になると思われる。

(2) 自己評価の方が園評価より高い学生

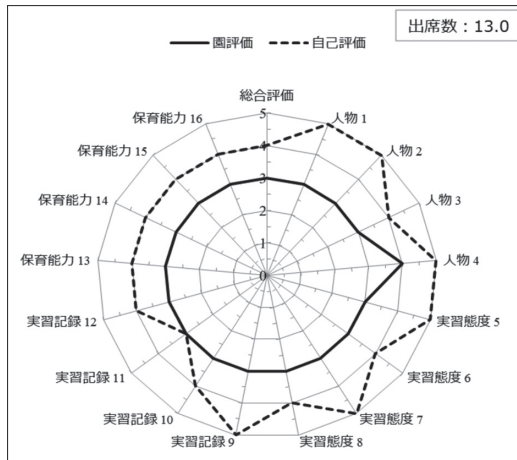


図4 学生C

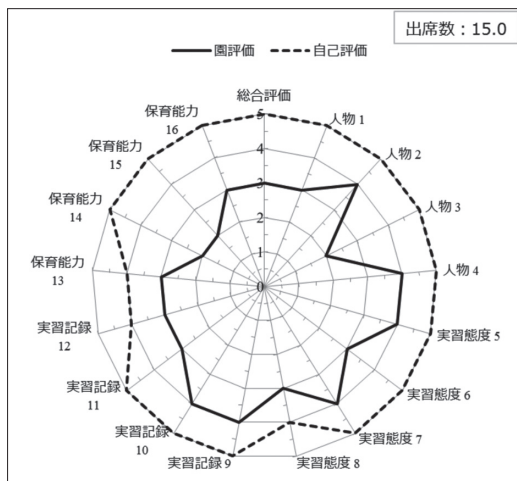


図5 学生D

学生CとDは、ほとんどの詳細項目において、園評価より自己評価が上回っている学生である。出席数は、13.0と15.0で両学生とも異なり、学業生活との関連はあるとはいえないが、双方とも最高基準をつけている項目が多く、自分自身としては、しっかりと実習していたという優越の認識が明確である学生といえる。

(3) 園評価と自己評価がほぼ同等の学生

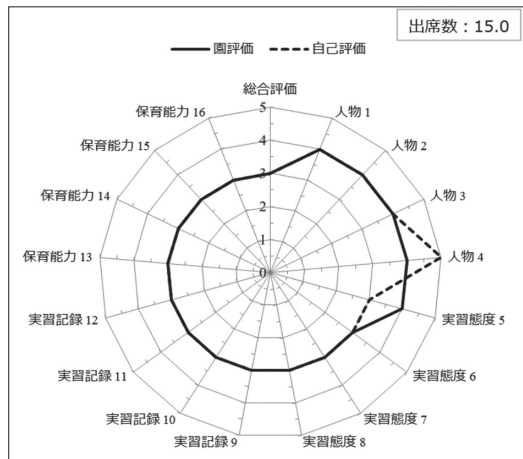


図6 学生E

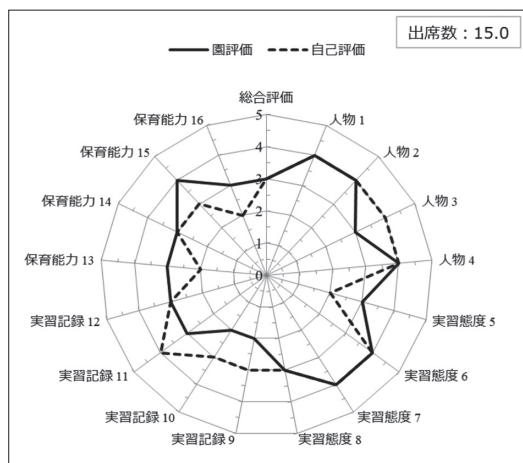


図7 学生F

学生EとFは、園評価と自己評価がほぼ同じに括られる学生である。出席点は双方ともに15点と授業は全出席学生である。普段から真面目に学業に取り組み、かつ客観的に自己を評価できるタイプであると思われる。

(4) 全実習学生の園評価と自己評価の平均値

図8は、全実習学生の園評価と自己評価の平均値を比較したレーダーチャートである。全体的に、園評価の方が自己評価を若干上回ることが同様に確認できる。

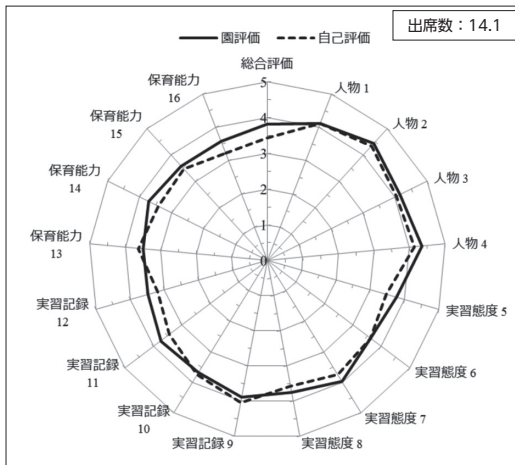


図8 全実習学生

4. まとめ

本稿では、本学の教育実習評価票の見直しに向けて、まず園評価と自己評価の差異から検討してきた。結果、調査対象とした平成28年度の2年生の結果からは、全体的に、園評価は自己評価よりも高い傾向にあることを確認した。4つの評価の観点のうち、実習園の評価で最も高い観点は「人物」で、最も低い観点は「保育能力」であった。このことは、学生の自己評価とも同じ結果で、双方とも評価認識に差異はなかった。一方、評価認識に差異が認められた項目は、人物の「健康管理」、実習態度の「事前準備」、保育記録の「観察力」「表現力・考察」、保育能力の「子どもの発達の理解」「指導計画」であった。

また、個別の結果について、園評価の方が高い学生、自己評価の方が高い学生、両評価ともほぼ同等といえる学生の3つのタイプに分けて考察を試みたところ、教育実習の授業の出席数と関連している可能性があることが示唆された。

実習評価は、科学的根拠に基づく基準というよりも、園側は、実習中の態度や責任実習の内容をみて評価者が主観的に判断する場合がほとんどである。一方、学生側は、実習中に受けた

指導内容や責任実習での手応え等の感覚で評価することになる。一般的に、実習園側は、幼稚園教諭として最低限達成している項目は「C.普通」と考え、できて当たり前基準と考える。これに対し、学生側は実習でできた項目は、「A.優れている」と認識している。今回の調査だけでは、そのことを科学的に証明するに至っていないが、園側の「できて当たり前」の感覚と学生側の「できた」感覚の違いが、評価をつける際の差異につながっていると思われた。

教育実習の評価は、自分の適性や専門性を客観的にとらえる大切な指標となる。そのため、できるだけ園側、学生側の評価認識が異なることがないように内容を改善していくことが必要である。また、今回のように評価の差異が明らかになったことで、逆に学生自身が自己の課題を見出す指標になるとも考えられる。

本研究によって、今後の本学の新たなカリキュラムの実施と平成30年度改訂の幼稚園教育要領の実施に向けて、評価項目の再考が必要であることは確認できた。事前事後指導の授業時のみならず、学業生活全般の態度育成も必要であることも考察された。

教育実習は、実習する園、時期、学年、地域によって実習の様相は一人ひとり異なるが、質の高い幼稚園教諭を養成していくためには、学生の学びに直結する具体的な評価項目への改善と、評価基準の設定が必要である。時期を逸せず、評価票を再考していく第一歩としたい。

注

- 1) 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryu/_icsFiles/afieldfile/2015/08/04/1359485_04.pdf#search 2017.1.10. 閲覧
- 2) 平成30年度に改訂される幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の明確化の方向性が示されることに伴い、幼児期の評価についても改善を図る

- 必要があるとしている。文部科学省 HP「資料 3 幼児教育部会とりまとめ（たたき台案）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1370317.htm 2017.1.10. 閲覧
- 3) 平成 22 年度「教員の資質向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果」より [www.mext.go.jp/b_menu/shingi /.../1364869_08.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1364869_08.pdf) 2017.1.10. 閲覧
 - 4) 岩手県保育者養成校連絡協議会では、平成 11 年度以降から実習評価表の統一化が図られている。大塚健樹 1999「幼稚園教育実習評価と自己評価の比較—本学幼児教育科学生の場合—」『盛岡大学短期大学部紀要』10 27-28.
 - 5) 中央教育審議会では、大学生の質の確保を目指して出した答申「学士教育課程の構築に向けて」の中で、「目的意識の希薄化、学習意欲の低下等、学生の多様化により、大学側の対応の困難性は増している」と報告している。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003/004.htm
 - 6) 現在使用の本学教育実習評価票は、平成 19 年度に改正したもので、サンプルは参考資料として末尾に添付した。
 - 7) 小山祥子 2004「教育実習と事前事後指導の現状と課題—3 週間実習後の振り返りから—」『北陸学院短期大学紀要』36 48-49.
 - 8) 前掲書 50.
 - 9) 出席数とは、「教育実習」の授業 1 回に対し、出席は 1、遅刻や早退は 0.3 の減点、全授業開講 15 回で算出した数値である。
- 241-262.
 実習問題研究会編著 2002『保育所・幼稚園実習のすべて』相川書房
 前橋明編 2012『実習指導概説』ふくろう出版
 田中東亜子・志賀智江・松村和子 2010『幼稚園教育実習』日本文化科学社
 小山祥子 2004「教育実習と事前事後指導の現状と課題—3 週間実習後の振り返りから—」『北陸学院短期大学紀要』36 39-54.
 大塚健樹 1999「幼稚園教育実習評価と自己評価の比較—本学幼児教育科学生の場合—」『盛岡大学短期大学部紀要』10 27-32.
 篠原祝子 2011「幼稚園教育実習における実習態度—平成 22 年度 6 月「幼稚園実習」の実習園評価と実習生評価の比較—」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』30 3 67-77.

参考文献

- 阿部和子 2016「第 12 章 実習—保育者養成の現状とこれから 3」『保育学講座 4 保育者を生きる—専門性と養成』日本保育学会

教 育 実 習 評 価 票

平成 28 年 月 日

実習生	年 組	番	氏 名				
実習園名			園 長 名	Ⓞ			
			実習指導者名	Ⓞ			
実習期間	平成 年 月 日 () ~ 平成 年 月 日 () (合計 日間)						
勤務状況	出勤 日	欠勤 日	遅刻 日	早退 日	備考		
	評 価 項 目	A	B	C	D	E	所 見
人 物	1.挨拶・言葉づかい	_____	_____	_____	_____	_____	
	2.服装・身だしなみ	_____	_____	_____	_____	_____	
	3.人柄・態度	_____	_____	_____	_____	_____	
	4.健康管理	_____	_____	_____	_____	_____	
実 習 態 度	5.事前の準備	_____	_____	_____	_____	_____	
	6.積極性	_____	_____	_____	_____	_____	
	7.協調性	_____	_____	_____	_____	_____	
	8.責任感	_____	_____	_____	_____	_____	
実 習 記 録	9.記録の提出	_____	_____	_____	_____	_____	
	10.記録の整理	_____	_____	_____	_____	_____	
	11.観察力	_____	_____	_____	_____	_____	
	12.表現力・考察	_____	_____	_____	_____	_____	
保 育 能 力	13.状況判断・かかわり方	_____	_____	_____	_____	_____	
	14.子どもの発達の理解	_____	_____	_____	_____	_____	
	15.遊びや生活の指導	_____	_____	_____	_____	_____	
	16.指導計画	_____	_____	_____	_____	_____	
総 合 評 価		_____					

※ A: 優れている B: 良い C: 普通 D: 努力を要する E: 特に努力を要する

